

## 過去5年間の赤血球製剤廃棄率の推移と今後の展望

◎持留 汐莉<sup>1)</sup>、北爪 玲子<sup>1)</sup>、寒川 裕未<sup>1)</sup>、沢田 郁美<sup>1)</sup>、山本 章史<sup>1)</sup>  
地方独立行政法人大阪府立病院機構 大阪国際がんセンター<sup>1)</sup>

### 【はじめに】

近年献血者の減少が問題となっており、血液製剤の適正使用と廃棄率削減が当院でも重要な課題である。2023年3月に赤血球製剤の有効期限が21日から28日に延長となったことは、特に廃棄率に少なからず影響を与えることが考えられる。今回、これまでの廃棄率の推移とその理由を分析し、今後の展望を示す。

【対象・方法】2018年1月から2023年11月までを対象とし、赤血球製剤の廃棄率とその理由を分析した。

### 【結果】

現在、当院の赤血球製剤の在庫数はA型・O型が12単位、B型が4単位、AB型が2単位である。廃棄率やその理由に関しては、輸血療法委員会ですら半期に一度周知している。2018年の赤血球製剤廃棄率が4%を超えていたのに対し、2022年には1.5%に減少していた。廃棄の内訳は、①使用頻度の低いAB型の割合が高かった。②同型の単位指定の製剤オーダーが複数の患者で重複し、それが使用されず在庫となったことで最終的に期限切れ廃棄となってしまうケ

ースが多く見られた。

2023年は、1～3月の廃棄率は1.49%、4～9月は0.45%であり、赤血球製剤の期限延長の影響があったと考えられる。この結果より、10月からA型とO型の在庫を10単位から現在の12単位に増やしたが、現在までの期限切れによる廃棄数は全型で0本である。これにより、今までの取り組みに加え製剤期限の延長が今後の廃棄率の削減に良い影響をもたらすことが期待できる。

### 【まとめ】

今後、廃棄率がさらに減少していけば、在庫を増やすことが可能となり、緊急時の迅速な対応に繋がると考える。また在庫が増えることで、日当直者の緊急輸血への対応に余裕が生まれるのではと思われる。輸血療法委員会などを通して臨床との連携を綿密に取りながら、廃棄率のさらなる削減と迅速な輸血対応に取り組みたい。

連絡先 06-6945-1181 (内線: 5219)